

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第14回）議事要旨

1. 日 時 平成26年1月31日（金曜日）14:00～15:30

2. 場 所 三田共用会議所第4特別会議室

3. 出席者 （委員）

永井座長，有賀副座長，梶谷委員，北田委員，木下委員，佐藤委員，里中委員，佐野委員，高鳥委員，成瀬委員，鉾井委員，三浦委員，三村委員，宮下委員，森川委員，矢島委員，和田委員

（協力委員）

大石委員，小槻委員，西藤委員

（事務局）

文化庁：河村文化庁次長，山下文化財部長，大和文化財鑑査官，江崎古墳壁画室長，渡辺古墳壁画室長補佐，川島記念物課長補佐，建石古墳壁面对策調査官，内田文化財調査官，林文化財調査官，宇田川文化財調査官，横須賀文化財調査官 ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：石崎副所長，川野邊文化遺産国際協力センター長，島崎研究支援推進部長，佐野保存科学研究室長，犬塚主任研究員，早川主任研究員 ほか

奈良文化財研究所：上田研究支援推進部次長，田中連携推進課長，平澤文化遺産部景観研究室長，高妻埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長，石橋飛鳥資料館学芸室長，中島主任研究員，降幡主任研究員 ほか

4. 概 要

（1）開会

（2）委員及び出席者紹介

（3）議事

①高松塚古墳壁画修理後の保存方針について

高妻室長から資料2に基づき説明があった後，次のとおり意見交換等が行われた。

佐藤委員：天井石については漆喰がはがれた箇所について亀裂が確認されているが，側石についても何か亀裂の特徴があるか。

高妻室長：壁1について，亀裂の特徴としては，天井石と接する部分が，角が押されて壊れているような亀裂，あるいは床石と接している下の部分に亀裂が確認されている。

木下委員：石室を構築するだけで強度がもたないという意味なのか。つまり，墳丘，盛土を再現して，荷重を更にかけるということをしなくてももたないという意味なのか。

高妻室長：解体の時点までは何とかもっていたのだと思うが，現在の亀裂の状態や，あるいは針貫入試験で推定されるような強度を考えると，載せてすぐにつぶれるということはないと思うが，それをどれだけ保証できるか。何らかの強化処置や接合の処置などが必要になってくると思われる。

北田委員：補強や強化をして安定化するというのは非常によいことであると思うが，現在何かアイディアがあれば教えて欲しい。

高妻室長：現状を把握することに力を集中しているが，実際にその石材を強化することになると，壁画面への影響や，亀裂をどう接合するか。断裂しているものは外して芯を入れるとか，いろいろ考えられると思うが，現実的にそ

れが可能なのかということも検討しなければならないため、もう少し、現状を把握しなければならないと思う。

次に、建石調査官から資料3、4、5に基づき説明があった後、次のとおり意見交換等が行われた。

西藤委員：古墳に戻す場合と戻さない場合について、石室・石材に戻す場合には、精神的にはいわゆる墓としての機能を再生するということになるのだろうと思うが、戻さない場合だと、もうその機能を破棄するというように思われるが、戻す戻さないだけでなく、そのようなことも考慮することについて皆さんの意見も聞いておく必要があるのではないか。

佐藤委員：壁画がその古墳の石室に描かれたものとしての歴史的な意味を重視するのか、単なる絵画としてみるのかという違いがあるような気がするが、そのあたりは国宝としての壁画の在り方と、特別史跡としての高松塚古墳の歴史的な異議をどう評価するかという問題があると思う。残念ながら、現状の高松塚古墳は、壁画は石室の石材とともに全部外に移動され、これは保存処置を完全にした上で、元に戻すという平成17年の基本方針の上で暫定的にそのようにしていると思っている。ただ、それを戻さないということであれば、別の形のことは考え得ると思うが、戻さないで今のままであるとすれば特別史跡としては恐らくもぬけの殻ではないか。昔の墳形は復元したけれど、石室も何も残っていないということになるので、特別史跡のままでいることに歴史的価値としては疑問を覚える人もいるのではないか。平成17年の時はそのような議論から、将来的にはということが置かれて整理がついたが、今回もし別のことを考えることになるのなら、その点を整理しておく必要があると思う。

江崎室長：特別史跡でありながら、壁画自体はないということが現実としてある。今回資料5において、高松塚古墳壁画修理後の当分の間の保存の在り方についてということ、を、「当分の間」ということをここに入れたのも、やはり恒久的な保存方針としては、カビ等の影響を受けない環境を確保し、古墳に戻すというものは厳然としてある。しかしながら、現在の壁画の保存状況や修理状況を踏まえて、あるいは石材も併せて考え、当分の間どうすればよいのかということを検討しなければならないと考えている。その点を御配慮いただきたい。

和田委員：現状から更に悪くならないような方向で話を進めていかなければならないので、今、石室石材と壁画が一体的に取り出されて、保存、修理されている状況は非常に評価を受けている形で進んでいっており、それは当面きちんと続けていく必要がある。ただ、その石室石材も壁画も全部取り出してしまったから、あとはもうもぬけの殻だとは言わないで欲しい。以前、高松塚古墳壁画劣化原因調査検討会の時に発言したことがあるが、発掘が終わって、遺物を出したからあとは古墳を壊してもいいだろうと考える行政がたくさんあり、そのように進んで行きかねないため、非常に注意が必要である。現地が残っていて、傷んでいるというよりは、まだそこに墳丘があるということを大事にして欲しい。今の形が仮整備の形で置かれているという格好であれば、今後その壁画と石材が修理されていって、保存されていく過程でも墳丘の方をどのように活用していくかということは、専門家の方からも墳丘の活用について御意見があったように、やはりそれを積極的に考え、もぬけの殻で墳丘しかないということではなく、そこを訪ねた人が実在感、臨場感のようなものを感じられるものを作ることも必要ではないか。

北田委員：被葬者が葬られたというところで、非常に神聖な場所であるというのはその場として確かであると思う。我々精神上的の祭りというもの、祀るということ

は非常に大切にしなければならない。だから、その中の石室がないとか、あるということとはまた別の、この価値観が我々日本人にはあるのではないかという気がする。そういう意味での大切さというものを我々は考えていくべきではないか。

佐野委員：美術史の立場でどうしても絵画として壁画を見るという姿勢が強くなってしまいが、現在石室を解体して壁画を修理しているが、単なるタブローとして見ているわけでは全くない。つまり、石室が全て解体された状態であっても、元々はどのような形であったのかを必ず考えながら、それを大前提として絵画としての状態で見ており、どのような形であっても高松塚の歴史性が失われているわけではないと思う。残念ながら長い年月を経て劣化するわけで、どのように保存し、次の世代へ伝えていくかに意味があるのではないか。

木下委員：「当分の間の保存の在り方」について、大変技術的な整理になっているのではないか。もっとこの遺跡全体の価値を明確にするような哲学が背景にあってという記述がなければ、もう方針、方向が決まるという危険性を感じる。高松塚古墳は壁画も含めて古墳研究にとって重要だというだけではなく、飛鳥時代、100年余りをかけて日本国を作り上げていった過程の最後の姿というまさに重要な歴史資産である。たとえ当分の間でも、歴史資産としての価値をできるだけ顕在化して、「当分の間の保存の在り方」を考えるべきではないか。

宮下委員：当分の間という条件がついており、当分の間がどこまで続くか分からないが、平置きの状態が長く続くことも考えられる。石材の耐久性について、平置きのままであるならば、特別補強に対する対策は講じなくても大丈夫なのか。それとも今の状態でも何らかの補強をしなければならないのか。

高妻室長：どうしても断裂している部分があるため、現在フレームで囲っている。強化処置をせずにフレームなしで可能かといえばそれは不可能だと思う。ある程度フレームないしは補強剤を使って周りを固めないと、いつかは断裂しているところが外れてしまうと思う。

宮下委員：イタリアで壁画を中心に研究しているが、一番問題になるのが、原作に対して後世でどのような手が加えられているのか、修復されているのかということである。一枚一枚フィルターをはがすようにして、原作に近づいて研究しているが、余りに保存あるいは修復ということにウエイトが置かれてしまうと、結局保存はされるがオリジナリティが失われるということがあるので懸念している。

森川委員：古墳壁画そのものをどう保存するのかという議論の過程で、古墳と壁画が少しバラバラの議論をされているのではないかという意見があった。現地に来ていただければ、飛鳥時代の歴史の様々なものが展開されたフィールドと、古墳が眠っているフィールドが少し違うことに気づいてもらえると思う。飛鳥時代に様々な永代供養の場所があった場所や古墳が眠っている場所は村の南西部に位置している。村自身も保存の在り方を検討しており、そこにあった古墳、史跡、特別史跡としての古墳の価値は、当分の間であっても少し離れて存在すると分かりづらいので、できるだけ近い場所で、古墳と一体的に感じられる形が、当分の間であっても本当はベストなのではないかと考えている。検討会の中でも、活用の視点で議論していただけるとありがたい。

高鳥委員：カビや漆喰の状況について、平成25年3月の第1回目の専門家公開の時より、平成25年12月の第2回目の専門家公開の時に改善されているとの意見があったそうだが、その短期間でそれほどきれいに改善されているのかという印象を持った。修理技術はかなり進んでいるので、そのようなこともあるのかなと認識したが誤解していた。全体を見て、当時カビによる劣化が問題になったが、専門家公開に参加された方は、修理が進んでおり、実はカビ

よりも自然劣化に近いのではないかというイメージを持ったという意味が強いのか。

建石調査官：この発言をされた方は、具体的にどの場所ということは伺っていないが、第1回目と第2回目で同じ場所を見て、クリーニングが進んだということ発言されたと認識している。

佐藤委員：古墳に戻すとか戻さないというオール・オア・ナッシングで議論するのではなく、戻さない場合でも戻すことの意義についてこのような配慮があるとか、戻す場合でも戻さない場合と同じような効果が確認できて、議論が戻す、戻さないということになると、何か問題があるのではないかと思う。現地の古墳をどう整備するかということにリンクするのではないか。

永井座長：戻すか戻さないかどうかという類のものではなく、あくまで交通整理のためにこのような仕分けをしていると理解している。最終的にはどちらかをもちろん選択することになるが、そこに至る様々な議論を整理しておくというものである。

和田委員：戻せばどうなるか、戻さなければどうなるかという項目で、将来の壁画を見守っていかなければならないので、その観点から、点検をするにはどちらの方がより適切かという項目を加えた方がよいのではないか。

梶谷委員：既にキトラ古墳の経験があるため、高松塚古墳を考える時も、ある一定の方向を目指して進みつつあるキトラ古墳の動きとの関係やもう少し分かるような記述があれば少し考えやすいのではないか。

里中委員：戻すか、戻さないかという二者択一だと、必ずどちらも反対意見、賛成意見が出てくる。それは、古墳というものをどう捉えるかという考え方の違いと、それぞれが置かれている立場、つまり、自分はどのような研究をしているか、どの部分を一番大切に思っているかによって違ってくるのではないか。現実にはどちらか決まらないから、あるいは決めない方が今のところよいのではないかという政治的配慮で、どっちつかずになって続いてしまうと、それはそれで問題がある。理想を言えば、どっちに行っても完璧なことができるような準備ができればそれが一番よいが、現実的に難しく、予算の問題もあり、国のやることは国民の理解も得なければならないということで、様々なジレンマがある。次回に向けてなるべく整理をという意見があったが、この問題は様々な観点から熱心に議論され、真剣に検討した結果、この結論に至ったということ、後世の人が見た時に分かるよう、コンパクトにしようと余り考えずに、膨大な書類になってもよいのではないか。

(2) その他

①キトラ古墳壁画の辰・巳・申・午の現状について

川野邊センター長から資料6に基づき説明があった。

②マクロ分割撮影によるキトラ古墳壁画の表面状態調査結果及び高松塚古墳壁画・キトラ古墳壁画の蛍光X線分析

高妻室長から資料7及び資料8に基づき説明があり、次のとおり意見交換等が行われた。

北田委員：蛍光X線による分析は重要な結果が得られていると思うが、一部判定ができないところがあることについて、ベンガラなど鉄の化合物といった粘土はX線回折などでかなり分かる可能性があるが、将来的にX線回折などを使用するか伺いたい。

高妻室長：判定できない部分の同定の必要性が出た場合は、そのような機器の導入も検討しなければならないと思う。ただ、現状では分光分析と照らし合わせて分析を進めながら、推定をしていきたいと考えている。

成瀬委員：赤の箇所は水銀がある程度検出されており、鉄も黄色い箇所と同じぐらい検

出されていると思うが、これは赤、朱だけと考えるのか、ベンガラも使っていると考えられるのか、それとも分からないのか。

高妻室長：ベンガラを使っているとまでは、まだ積極的には言えない。分光分析については測定点を増やしているので、3月の検討会ではまた報告できると思う。

③国宝高松塚古墳壁画修理作業室の公開（第11回）について

渡辺補佐から資料9に基づき説明があった。

そのほか、事務局から、第15回検討会を3月27日（木曜日）14時から中央合同庁舎第7号館東館3階3F1特別会議室において開催するとの報告があった。

（3）閉会

以 上